



国際地学オリンピックオンライン開催

初のオンライン大会で日本チーム大健闘



IESO2021 開会式の様子 日本チームは伝統衣装の浴衣で参加した (8月25日)

今年8月25日から30日にかけて第14回国際地学オリンピック(IESO2021)がウェブ会議アプリを用いたオンライン形式で開催された。井上真一(灘高等学校2年)、岩崎野笑(神戸女学院高等学校3年)、佐藤弘康(栄東高等学校2年)、孫翰岳(筑波大学附属駒場高等学校2年)の4名で構成された日本選手団は感染対策を講じたうえで茨城県つくば市内にある「ホテル東光」にて一連の日程に参加した。

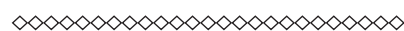
本大会には34の国と地域から185名の選手が参加、開会式と閉会式は全世界同時に行われ、その他のイベントについては国ごとの時差を考慮した3つのタイムゾーンに分割、実施された。また、今

年度はオンラインという初の試みであった為、試験を対象とした金銀銅メダルの授与は行わず、イベント毎にExcellent・Very Good・Goodの三段階評価が採用された。期間中の主なイベントは6種類。(下段参照)

個人成績が競われたDMTでは事前に掲示されたウェブサイトやアプリを利用して自ら必要なデータを発掘し、それらを基に考察する問題が出題された。日本チームは孫選手がExcellent(金メダル相当)、岩崎選手と佐藤選手がVery Good(銀メダル相当)、井上選手がGood(銅メダル相当)を獲得した。国別野外調査を行うNTFIでは、日本チームは茨城県南部の桜川の火山岩礫の由来

について調査した「Why are you here? The mystery of an incomprehensible stone」を発表、Very Goodの評価を受けた。国際混合チームで調べ学習を行うESPでは井上選手のチームと佐藤選手のチームがそれぞれVery Good、岩崎選手のチームがGoodの評価を獲得した。同じく国際混合チームで実施のMission to Marsは宇宙開発に関する専用のアプリを使ったグループワークで、孫選手の所属グループが全体4位の高スコアを獲得した。地学の有効活用を提言する地学宣言(Earth System Pledge)及び地学・環境に関する芸術作品(詩・絵画・彫刻・音楽等)の地学アート(Earth Science and Arts)は大会期間中にネット上に公開され、参加者による投票が行われた。日本選手団からは孫選手が二点の絵画、佐藤選手が自作の絵と音楽による動画を出品した。

国際大会は国際交流がメインだが、本大会では様々なアプリを用いてチャットや通話を駆使した積極的な交流が行われた。国際地学オリンピックは来年もオンラインで開催される予定。



【今号の紙面】日本代表選手の感想(2面)
／オンライン大会の課題・座談会開催(3面)
／リレーエッセイ(4面)

国際地学オリンピックのイベント6種

- データマイニング試験(Data Mining Test :DMT) / 火星探査体験(Mission to Mars)
- 国別野外調査(National Team Field Investigation :NTFI) /
- 地球システム調べ学習(Earth System Project :ESP) /
- 地学宣言(Earth System Pledge) / 地学アート(Earth Science and Arts)

IESO2021 を終えて

日本代表選手に国際大会の感想を伺いました

一生モノの衝撃

Earth System Pledge、Earth Science and Art では、全ての作品に様々なベクトルの熱量を感じました。いったいどれほど時間と労力をかけたのかというほど作りこまれたものもあれば、本当に地学が好きなのだと伝わってくるものもありました。心から本気で物事に取り組むことが少なかった自分にとってこのような熱は衝撃で、真似したいと思う一方で、ろくなものは出せないからとトライしなかったことを後悔しました。

ESP の準備と発表では、他国の生徒の英語力と事務能力には特に驚かされました。最初のミーティングでは自信も不安も吹き飛ばされ、ただついていくので精一杯でしたが、何とか食らいついて何かしら貢献をしようとするうちに、最後には順応し、うまく動けるようになったと感じます。「あきらめないこと」や「持てる武器で戦うこと」はありふれた言葉ですが、そういう信念を自分の中に取り込めたことは僕がこの大会で得られた大切なものの一つです。

井上真一（灘高等学校2年）



ハチマキで気合！

トラブルに負けない強さ

DMT は新しい形式で、データをサイトから読み取って解くものでしたが、初っ端からサイトの使い方が分からず15分くらい何もできずにいました。メダルが取れないんじゃないかと相当焦りましたが、冷静になって2題目に移ってみるとなんとか解き進めることができ、Very Good(銀メダル相当)をとれ

て良かったです。いろいろ大変でしたがDMT 自体は、オンラインで調査したり博物館に行ったりして、普通のテストとは違った楽しみがありました。初のオンライン参加だったのでDMT のトラブル以外にもESP で自分のチームの発表の直前になってもGoogle Meetに入れなかったり、Zoom で音が通らなかったり大会中何度も挫折そうになりましたが、それぞれをなんとか乗り越えることで、冷静さを保てばどんな時でもうまくいくと強い自信と負けない精神がついたと思います。研修も含めた14日間は今までで人生で経験したことがないほど刺激的で、楽しく、貴重な経験でした。

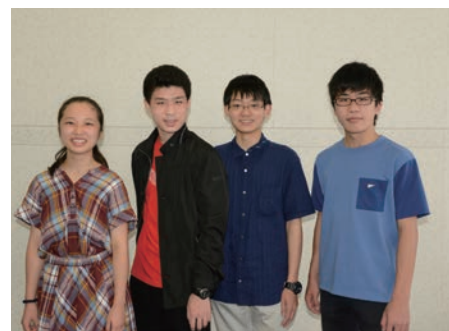
岩崎野笑（神戸女学院高等学部3年）



SNS を駆使して国際交流

異例づくしの大会

今大会はとにかくイレギュラーな大会で、従来の筆記・実技試験はDMT という「分析的な」試験に変わりました。事前に概要は聞いていましたが、いざ始めてみるとあまりにも今までと問題の毛色が違うので、これには最初面食らいました。衛星写真を分析したり、バーチャルフィールドワークをしたり。とても斬新で楽しかった一方、「石を見る」という私の一番の武器があまり役立てられなかったのは少し残念だったりもします。他の国の選手と一緒に場所でフィールドワークができない都合上、開催国での現地調査は自国の調査に変更されました。これに関しては研修でフィールドワークを行ない、概ね資料もできていました。



左から岩崎選手、孫選手、佐藤選手、井上選手

しかし、大会が始まる前に先生方より辛口なご指導を受け、根本的な構成から見直すことになりました。「前提を知らない人に対して、どのようにしたら主張を明瞭に伝えられるか」4人でかなり頭を悩ませ、ほぼ1日かけてなんとかまとめ直しました。この苦労は本当に勉強になり、後のESPの資料作成にも生かすことができました。

佐藤弘康（栄東高等学校2年）

大きな飛躍を経験

自分は地学オリンピックに参加することで普通では到底歩み得ない大きな一歩を踏み出せたと実感した。巡検、先生方の講義を受けたこと、仲間とともに勉強したこと、刺激を受けなかったことなど一つもない。思考力、洞察力、英語力が伸び、そして知識も大きく増えた。なによりも、今までで最も楽しみながら学べた時期であったと思う。

他国の学生とごちない英語で協力してタスクに取り組むうちに、互いの姿が見えない中であっても、言葉よりも多くの何かを感じるがあった。初めは互いにかしこまった印象を受けたが、しばらくすると打ち解けて話せるようになり、それでも話すのが大変で、より英語力を伸ばす必要性に改めて気付かされた。国際チームでのアクティビティが例年に比べ減ったとはいえ、今大会を通して仲良くなり今でも連絡を取り続けている友人が出来た。この人のつながりを将来においても大事にしていきたい。

孫翰岳

（筑波大学附属駒場高等学校2年）

オンライン大会の課題と可能性



コロナウィルスの世界的パンデミックにより国際地学オリンピックはオンライン開催という大きな変革を強いられた。

同時開催の難しさ

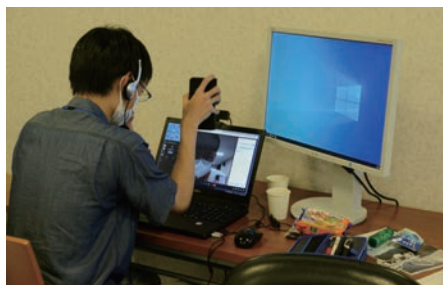
各イベントはアジア / 欧州 / 米国の3つのタイムゾーンに分割開催を余儀なくされ、これにより国際交流は例年に比べやや限定的なものとなった。日本チームは合宿形式をとり、メンター、オブザーバー、地オリ OB の手厚いサポートを受けつつ万全の態勢で臨んだが、コロナ禍の影響で国内の移動も困難な国では自宅からの参加を余儀なくされる選手も数多くおり、全てがフラットとは言い難い条件下での開催となった。

NTFI で深まる日本チームの絆

例年国際地学オリンピックのメインイベントとして行われる国際編成チームによる現地調査は各国選手団が自国を調査し発表する National Team Field Investigation (NTFI) へ変更された。日本チームは産業技術総合研究所の高橋雅紀博士の全面的なご指導の下、例年行っている実技中心の秩父合宿、座学中心のつくば合宿を NTFI の準備に充て、発表

メダルがない？

国際地学オリンピックのメインイベントである筆記試験と実技試験は不正対策が難しいことから実施せず、ウェブ上の情報を用いて考察する Data Mining Test を用いて個人成績を評価することとなった。個人成績票は発行されるものの、オリンピックにメダルがないことは参加選手のモチベーションを大きく下げってしまうと多くの国から反対意見が多く寄せられ、来年の課題となった。試験の問題傾向は例年と似通っており、従来の研修内容が有効と思われる。



交流は活発

国際地学オリンピックが最重要視する国際交流。例年の合宿形式を知るメンターや OB の心配をよそに、選手たちは各国選手のメールアドレスが配布されるや否や SNS を駆使し各国のチームメイトと連絡を取り合った。今年は Earth System Project と Mission to Mars で国際チームが編成されたが、それ以外にも自主的な交流会がいくつも開かれ、選手たちは積極的に参加し、交友関係を広げていった。

システムに課題

発表の際に音声トラブルが発生する、発表チームが Google Meet にログイン出来ない、発表するスライド提出形式がわからない等々、運営側の不備が目立った。国際地学オリンピックは来年もオンライン開催が予定されており、改善が望まれる。



資料は選手同士で連絡を取り合いつつ担当のパートを作成した。選手たちは本格的な巡検に参加しながら、地学への向き合い方からプレゼンテーションの心得まで丁寧な指導を受けた。また、プレゼン資料を共同で作成することにより互いの知識や技術に触れ大いに刺激を受け、かつ日本チームとしての絆が生まれたことは今大会の大きな収穫であった。

小説家川端裕人先生との座談会開催

2021年9月26日に「空よりも遠く、のびやかに」(集英社文庫2021年)の作者川端裕人先生と各方面で活躍している地学オリンピックOB6名(橋本氏、中里氏、安河内氏、小山氏、田中氏、大野氏)(司会は元理事長の久田氏)で座談会を開催しました。

「空よりも遠く、のびやかに」は地学オリンピックを目指す高校地学部とボルダリングを合体させた青春小説です。OBが在籍していた高校地学部の様子がよく描かれており、「地学とは何か」などの話題で盛り上がりました。座談会の様子はHPに掲載されています。是非ご覧ください。



川端先生(後列右から3人目)を囲む座談会メンバー

